

青いオウムの秘密

ロワジィ 作 榊原晃三 訳

文研出版



文研児童読書館のねがい

わたしたちは、わたしたちをとりまく、
さまざまなものからいろいろ学んで大き
くなっていきます。学校での学習からも、
テレビやマンガからも、科学や知識を身
につけ、また楽しみを味わいながら育っ
ていきます。

けれども、せっかちに知識ばかりを自
分のものにすることや楽しさだけを急い
で追うあまり、ともすれば、人生の真実
とは何か、人間として、どのように生き
ていくべきか、ほんとうの美しさとは何
か、というようなたいせつなことを、忘
れがちになるようです。これは、とても
残念なことです。

そうならないためにも、わたしたちは
人生の教師としての文学、ただしい生き
方を身につけさせてくれる読書というも
のをたいへん重要なものと考えています。

このたび、わたしたちは、多くの著者、
訳者、画家のご協力によって、今なお新
鮮な感動を与えてくれる世界の名作文学、
貴重な文化遺産である神話や民話、さら
に伝記、ノン・フィクション、または未
紹介の新しい力作などを選んで、文研児
童読書館として、おとどけすることにな
りました。

みなさんがたの必読基本図書として、
いつまでも愛読していただけるものと信
じています。

編集委員

石森延男
昭和女子大学教授・日本児童文学学会会長

植田敏郎
一橋大学教授・日本児童文学学会理事

白木 茂
日本児童文芸家協会常任理事

関 英雄
日本児童文学者協会理事長

中川正文
京都女子大学教授・日本児童文芸家協会理事

福田清人
前立教大学教授・日本児童文芸家協会理事長

文研出版編集部



青いオウムの秘密^{ひみつ}

ロワジイ作

きかきばらこうぞうやく

榊原晃三訳

きくろい きこと え

桜井誠絵

文研出版







一 ジプシーの一家…………… 11

二 新任の先生…………… 29

三 青いオウム…………… 39

四 ドン・チビュルシオの悲劇…………… 54

五 かざり格子こしのなぞ…………… 79

六 ドン・ビセンテのやしき…………… 104

七 先生の夢…………… 123

八 オウムのゆくえ…………… 131

九 そうさ開始…………… 149



十 へんな宿屋……………174

十一 ろう屋で海賊と……………181

十二 紋章の秘密……………211

十三 もどってきたオウム……………231

十四 宝のめぐみ……………239

訳者あとがき……………243

機知とユーモアと 白木茂……………246

桜井誠絵



〈ペピート〉

このお話の主人公。明るく、りこうで、冒険好きなジブシー少年。ドン・パプロ先生の青いオウムから、すばらしい宝の秘密をかぎだす。

〈おばあちゃん〉 生まれつきのジブシー女。いせいがよくてぬけめがない。

〈ドン・チューチョ〉 ジブシーでペピートの父。

〈しみったれ〉 ペピートのやさしい母。おし。

〈ドン・パプロ先生〉

おひとよしで学問がある。ペピートたちの先生。ペピートをやさしくみちびきながら、いがいな事件にまきこまれる。

〈ロベス〉

ペピートの級友。クラスの優等生。いろいろのちえをかしてくる。

〈グレゴリオ〉

ペピートの親友のフタ飼いの少年。辺鄙なきらいだが、ペピートと

おもな登場人物

〈ラモン〉

もとエスキュドス家の下男。密猟の名人で狼ではペピートの先生。

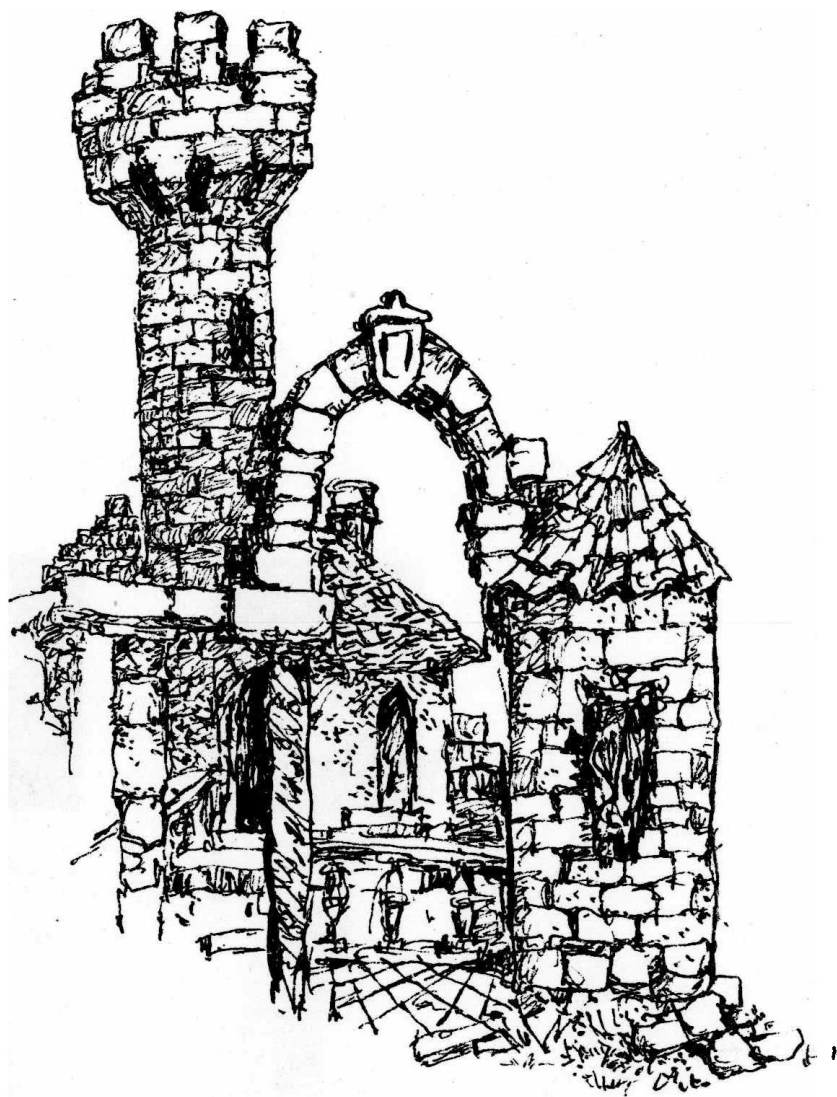


青いオウムの秘密

ひみつ

ロワジイ作

榊原晃三 訳





萩原晃三（さかきばらこうぞう）
 一九一六年愛知県に生まれる。
 一九五六年早稲田大学大学院フ
 ランス文学科修士課程修了。小学館
 編集を経て、現在翻訳に従事。少
 年文芸作家クラブ会員。日本翻訳
 家協会会員。主要訳書——『にん
 じん』『ファールブル昆虫記』『ケッ
 セル』『騎馬の民』『ユゴー』『九十三年』。
 ウアイス『ロダンの生涯』。



桜井誠（さくらいまこと）
 一九一二年静岡市に生まれる。
 同舟舎絵画研究所で油絵を学ぶ。
 現在、日本美術家連盟、児童出版
 美術家連盟会員。



一 ジプシーの一家

この物語が始まるころ、ぼくらの一家はくずれかけた城に住んでいた。これはむかし領主のやしきだったものだ。

この城は、正面から見ると、西のはしに銃眼のついた塔があり、まだまだりっぱに見えた。入り口の両側にたっている門柱には、それぞれ窓がついていて、鉄製のうつくしい格子がはまっていた。でも、内部は、二十年前もそうだっただろうが、略奪や戦いを示すようなものは、ほとんど残っていない。敷石をはった中庭のすみには、くずれてきた建物の残骸が、うず高くつんであった。やっと残っているアーケードをささえている白い大理石の柱のかけには、色あせたカバーをかけた古い荷車が置いてあった。そして、むかしは噴水が吹きだしていた青いモザイクの泉水は、ごみやくずが山とつまれていた。よく、家は『くずれていく』といわれるが、確かに、『くずれていく』ということばは、この城にぴったりのことばだった。ときどき、夜中にはりが落ちてきたり、屋根がわらがざあつくずれかかってきたりして、ぼくらは目をさましたものだった。あくる朝になると、祖母がそのくずれた石やほこりを

はき集めて、庭のすみにつみ上げた。中に木ぎれなどがまじっていると、スーブをあたためるたき木にしてしまうのだった。

でも、ぼくにとっては、やはりわが家だった。世界じゅう、どこにいても、こんな家は見つからなかった。

みんなの話によると、ぼくが生まれて五、六日あとのこと、ぼくの父はピラヌエバという村の広場にテントをはったそうだ。ちょうど、そこは村長のやしきのうらになっていた。村長は、二日ほど、黙ってがまんしていたが、とうとう、三日めに、たまりかねて、父たちにでていけといった。

ちょうど、秋のおわりの突風が吹くところで、寒かった。ほかによい場所が見つかるまで、あと五、六日おいてほしい、と父はたのみこんだ。そこで、村長は、この焼けあとの城のことを思いだした。こうして、ぼくの両親はここへうつってきたというわけだ。

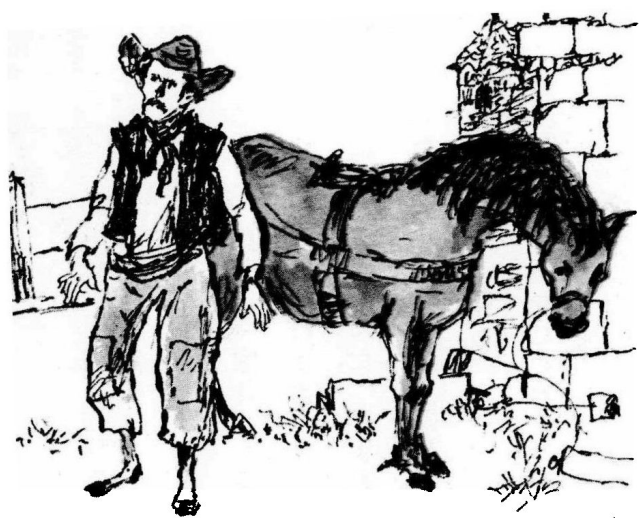
さて、中庭のおくに、まだ完全に立っている小屋が二つあった。これは、むかし、食料やたきぎをたくわえるのに使われたものだった。この小屋には、窓こそついていかなかったが、屋根とドアだけはちゃんとついていた。ドアのちようつがいはさびていたが、しっかりしていて、どろぼうをじゅうぶんふせぐことができた。生まれてから、ほとんど戸外でくらしてきた父と祖母にとっては、こんな小屋でもがまんできた。それから、ちゃんとした家でそだった母にも、頭の上に屋根がある家に住めることは、う

らしいことだった。とにかく、ぼくら一家は、ここに住みついた。ここをはなれるにしても、ずっとあとなつてからのことだ。

そのころ、ぼくら一家は、もう放浪ほうろうの生活をやめていた。母が、道ばたで寝ねるのはいやだ、といいだしていたからだ。そのうえ、母は不具ふぐだったので（母は生まれつきのおしだった）、なおのこと、おくびようになつていたのだ。ひよわな人間が大きらいな祖母そばは、母の病気を『しみつたれ』などとひやかしていたが、こんな病弱のために、母はわらぶとんに寝ねたつきりの日がよくあつた。母は頭痛づつうみたいなので苦しんでいたんだと、ぼくは思う。でも、そのころは、みんなで、『アンナのしみつたれ』といつて、よくからかったものだった。

『しみつたれ』がわらぶとんに横になつてゐる日がつづくと、ぼくは母のそばでつきつきのるすばんを、おおせつかつた。すると、首の長い水さしに水をくんだり、夕食のスープを作つたりしなければならなかつた。母のそばにいないときは、家族につれられて、あちこちのいなかへいった。いなかで、やなぎの小枝こえだであんだかごを売り歩いてゐたのだ。また、週に二回、いなかの市にでかけていった。市では、飼かっているクマやヤギのブランシェットを踊おどらせて、お金をもらつてゐたのだ。

その日も、母の『しみつたれ』が始まつてゐた。でも、ぼくは前から、この日はバルセキーヨの市へ家族といつしよにいこう、とかたく決心してゐた。バルセキーヨの市は、一年じゅうでいちばんたいせ



つな市だった。それに、その日は、親友のグレゴリオとも会うことになっていたのだ。グレゴリオは、ドン・ビセンテの地所のブタ飼いの少年で、その日は、ぼくにナイフを買ってくれる約束になっていた。ドン・ビセンテの地所のことを、ぼくらは『コルティーヨ』と呼んでいた。

毎年、グレゴリオはその市にブタをつれてきて、かわりに、いくらかのお金をもらっていた。だから、この市の日だけははずしたくない、とぼくが考えるのも、あたりまえだろう？

その日、ぼくは朝早く起きて、泉の水をくみあげ、水さしを母のまくらもとに置くと、中庭へ走っていった。そこでは、もう、父が年とった馬のアゾールを、荷車につないでいた。

父はぼくの顔を見ても、黒いひげをひねったただけで、なにもいわなかった。祖母が味方になってくれることを、ぼくはよく知っていた。祖母がクマのアタトロールをくさりで引っぱりながら、大広間からでてきた。このアタトロールというクマ



は、ほんとうになまけものだった。アタトロールのあとから、ヤギのフランシエットが、はねまわりながら、でてきた。

祖母がぶつぶついった。

「このおクマさまったら、いつも車にのるんだってきまつてるくせに、まだぐずぐずいうんだから、まったくしょうのないやつだよ。ほれ、おのりちゅうのに、アタトロール。」

祖母はなんとかアタトロールを車に押しこまなければならなかった。これは、見るもおかしな光景だった。だって、祖母は小さくてやせっぽちなのに、クマのほうは大きくて、ぶくぶく太っていたからだ。ぼくはたまらなくなって笑いしたが、すぐ、こうかいした。

祖母が、こうどなったからだ。